第116号
（創刊：1994年12月15日）

Hirosaki University Hospital Bulletin　弘前大学医学部附属病院広報

南塘（なんとう）だより

発行：弘大病院広報委員会
（委員長：田坂　定智副病院長）
〒036－8563　弘前市本町５３
TEL：0172－33－5111（代表）
FAX：0172－39－5189
https://www.med.hirosaki-u.ac.jp/hospital/

※南塘とは，弘前市史によると医学部敷地内にあった南溜池のことをいう。

2025年（令和７年）1月24日

病院長からの一言
さくら基金の創設について

弘前大学医学部
附属病院長　袴田　健一

患者さんやご家族，企業の皆様から，時折ご寄附のお申し出をいただきます。多くは適切な医療提供への感謝や職員の心温まる対応への感謝の言葉が添えられています。併せて，地域医療の最後の砦として，安全で質の高い医療を提供し続けることへの期待もいただきます。

この度，このようなお気持ちを大切に受け止めて，本院の発展に有効に活用させていただくことを目的に「弘前大学医学部附属病院さくら基金」を創設いたしました。より良い診療環境の整備や職場環境の充実，医療スタッフの教育体制の充実，国際交流の推進，最先端医療の充実や研究推進などに充てられます。院内各部署にはポスターを掲示し，税制上の優遇措置等を記載したパンフレットも準備しました。また，ご寄附をいただいた方には桜をデザインした特別な診察券が贈られます。病院を利用される皆様に是非「さくら基金」をご案内いただければ幸いです。

さて，いよいよ新たな病棟整備が始まります。しかしながら，コロナ禍前後で社会の医療ニーズが大きく変化し，以前に思い描いた病院像を見直す必要が生じています。少子化検討会議からは，「周産期医療に関わる産婦人科病棟とLDR，NICU，GCUは一体運用が望ましく，手術部に近接する必要がある」との答申をいただきました。当初計画とは大きく異なります。また，現在第二病棟に配置されているリハビリテーション部やメディカルスタッフ研修室は，20～30年後を見据えて施設整備を図る必要があります。病室配置のあり方についても，患者さんの診療環境向上の観点のみならず，新興感染症時に病棟機能を維持し続けるためには「より多くの個室」が必要なことを，私たちはコロナ禍を通じて勉強してきました。病院全体に目を向けると，狭隘化した複数の部署の拡充の必要性，手術室と付随する医療機器収納スペース確保の必要性，MRI増設の必要性，職員用ロッカールーム増設や職員食堂等の福利厚生施設充実の必要性など，解決すべき課題は山積しています。

一方で，課題の多さは解決できる可能性の大きさとも言えましょう。職員の皆様と知恵を出し合い，未来に向かって力強く発展できる大学病院となることを目指して新病棟の整備を進めてまいりたいと思います。

令和５年度ベストやまびこ賞，Good Approach賞，Good Job賞 表彰式を開催

令和５年度ベストやまびこ賞，Good Approach賞，Good Job賞の表彰式を令和６年７月30日に執り行いました。

ベストやまびこ賞とは患者さんからの投書のうち感謝の投書が多い部署を表彰するもので，消化器/乳腺/甲状腺外科，入院棟東５階，リハビリテーション部の３部署が，Good Approach賞とはインシデント報告のうちレベル０の報告が多い部署を表彰するもので，呼吸器内科/感染症科，入院棟東３階，薬剤部の３部署が受賞されました。

また，Good Job賞では医療行為が行われる前に患者さんとのコミュニケーション等により医療事故を未然に防いだ個人を表彰するもので，耳鼻咽喉科頭頸部外科福岡侑医師（電子カルテに異なる患者のお薬手帳のデータがスキャンされていたことを発見した事例），第二病棟５階　三上真紀副看護師長（抜歯予定となっていた患者の検査結果に骨髄抑制があることに気付いた事例），第二病棟６階　加藤智美看護師（ペニシリン系薬剤アレルギーの患者にペニシリン系抗生物質が処方されていることに気付いた事例），第二病棟７階　毛内麻美看護師（左眼の手術予定であった患者さんについて，右眼で手術が申し込みされているのを発見した事例），放射線部・光学医療診療部　久保沙織看護師（大腸内視鏡的粘膜切除術に際して，休薬すべき抗血小板剤を休薬していなかったことに気付いた事例），手術部（現　入院棟東４階）原田京佳看護師（手術中，医師から返却された縫合針の針先が破損していることに気付き，すぐに医師に報告したことで，体内遺残を確認し除去することができた事例）の６名が受賞されました。

受賞された部署及び個人には袴田病院長から表彰状と副賞が贈呈されました。袴田病院長からは，患者さんのために日々診療にあたり，患者さんを守るというプロとしての想いに感謝のお言葉と，そして，この想いを病院全体に拡大していってもらいたいと期待のお言葉がありました。

各診療科等の紹介　【集中治療部】

当院の集中治療部は1983年7月25日，尾山力麻酔科教授を部長，石原弘規講師を副部長として４床のClosed ICUとして開設されました。東北では東北大学に次いで２番目の開設で，伝統ある集中治療部です。ベッド数も1985年に６床，2004年に８床，そして，2012年に術後管理に特化したSurgical ICU８床を増床し，現在16床体制となっています。多くの診療科の協力もあり年間，約2000名の患者が入室するICUとなっています。

当院には高度救急救命センターにも救急ICUがあり，循環器内科系重症患者，外傷患者などは救急ICUに，外科系重症患者はこちらの院内ICUへという住み分けを行っています。新型コロナウイルスのパンデミック時にも，重症コロナ患者は救急ICUで，それ以外の重症患者は院内外を問わず院内ICUで治療を行うという体制とし，癌の手術や心臓血管手術も継続することができました。

集中治療部の医師スタッフは代々麻酔科学講座から選任されてきましたが，実は1985年から1997年までは第１外科，第２外科，整形外科から，2012年～2016年までは消化器・乳腺甲状腺外科，泌尿器科からも選任され，複数診療科による共同運営が行われた時期もあったのは知る人ぞ知る事実です。現在の集中治療部は，集中ケア認定看護師を含む看護師，臨床工学技士，専任薬剤師，専任栄養士，リハビリスタッフ，そして集中治療専門医からなるチーム医療で重症患者の治療に当たる体制となっています。

また，2022年10月には厚生労働省が新型コロナウイルス感染症治療における集中治療医の活躍を認め，「集中治療科」を医師の従事する主たる診療科として認める通知がありました。これを受けて本院も2023年４月より「集中治療科」を標榜しました。さらに，2025年１月からはむつ総合病院ICUと遠隔ICU診療を始めることになっており，当院の集中治療体制のネットワークを青森県に広げて行く計画です。

（集中治療部（集中治療科）
副部長　橋場英二）

小児ねぷたを運行

津軽地方の伝統行事「弘前ねぷたまつり」が８月１日から７日間行われ，弘前大学は８月１日の合同運行に出陣しました。昭和39年の初参加以来，今回で58回目の出陣を果たしました。

合同運行開始前に，附属病院外来診療棟正面駐車場において，小児科に入院中の子ども達や保護者，医師，看護師，事務職員等による「小型ねぷた」が運行されました。本学はやしサークル「弘前大学囃子組」等による太鼓と笛の音にあわせて，子ども達は「ヤーヤドー」と元気な掛け声を響かせ，津軽の短い夏の夜のひとときを楽しんでいました。

合同運行でも，学生や留学生，役員，教職員など多くの関係者が参加し，弘前の街を練り歩き，大いに盛り上がりました。

先憂後楽
ICTを活用した遠隔医療

病院長補佐　玉井佳子

とある秋の月曜日，私は朝５時40分に起床し，6:39弘前発の列車・新幹線を乗り継いで青森労災病院（八戸市）の外勤に行きました。８時45分から専門外来を始めましたが，患者さんが途切れることもなく，17時まで診療が続きました。患者さん・付き添いの方は，長時間をかけて来院し，中央採血室に行った後に待合室で何時間もひたすら順番を待ちます。外来輸血を受ける患者さんは，採血検査後に交差適合試験が必要なのでさらに１時間以上待ってようやく輸血が始まります。輸血には１時間半以上を要します。青森県内の医師不足，各領域の専門医不足，大学・公立病院勤務医不足を痛感する外勤日です。青森県は，特徴的な地形と冬期間の積雪・吹雪による交通障害の問題もあります。

弘前大学医学部附属病院改革プラン（2024年）では，「ICTを活用した遠隔医療を推進すること」が運営改革の基本方針のひとつとして挙げられています。弘前大学医学部附属病院と下北医療センターが運営するむつ総合病院との間をオンラインで結んで患者を診療する「遠隔治療」が2024年12月から始まりました。消化器外科，消化器内科が先陣を切り，診療科ならびに連携病院は順次拡大していく予定とのことです。

患者さんの病院内での動線（受付，検査，待ち時間，会計等）はあまり変わらないかもしれませんが，通院時間の大幅な短縮が期待できます。デジタルに精通した人にとっては，利便性が高まると想像します。外勤医師は移動時間の大幅な短縮が見込まれ，医師の働き方改革の大きなアドバンテージになることでしょう。専門医が，より幅広い県内医療機関の患者さんを診察できるメリットもあります。一方で，患者さんの満足度については注視していく必要があります（特に小児や高齢者では，対面での問診・視診・聴診・打診・触診がないことに不満を覚えるかもしれません）。私のようなデジタル音痴の人間は，モニター越しの診療を想像すると，不安な気持ちが大きく立ちはだかります。最大多数の人間にとって利便性・快適性が増し，医療の質向上が図られる良い施策に発展することを望みます。

火災総合訓練を実施

本院では2024（令和６）年８月29日午後に火災総合訓練を実施しました。今回の訓練では第二病棟５階でトラッキング現象に起因した火災発生を想定し，自衛消防組織の本部隊と出火場所である第二病棟５階とその周辺の地区分隊が連携し合い，初期消火から通報，避難までの一連の訓練を行いました。

消火器一本の噴射時間を確認するなど実際の火災時の行動を意識して訓練を行い，患者を所定の避難場所まで問題なく誘導，移送することができました。

コロナ禍で平成２年から全体的な訓練を行えていなかったため，４年ぶりの訓練となりました。病院は消防法で年２回以上の防火訓練を実施するように義務づけられておりますので，今後は定期的に訓練を実施して参ります。

オンライン診療の実施に向けて

令和６年11月20日（水）に，弘前大学医学部附属病院において「弘前大学とむつ総合病院間のオンライン診療の実施」に関する記者会見を実施しました。

会見には福田眞作 学長，袴田健一 附属病院長のほか，一部事務組合下北医療センター管理者である山本知也 むつ市長及び松浦修 むつ総合病院長，青森県から守川義信 健康医療福祉部長にご列席いただき，取組の概要や期待される効果について各出席者から説明が行われました。

会見後にはオンライン診療のデモンストレーションを遠隔医療センターで行いました。ビデオ通話により本学の医師がむつ総合病院の診察室にいる患者役へ問診を行ったり，本学が開発した専用のシステムを使い，むつ総合病院側の電子カルテに記載を行ったりしました。

オンライン診療が実施されることにより「むつ・下北地方」から片道３時間以上の時間を要して来院される患者さんや付添いの方々の身体的，経済的負担の軽減などが期待され，高度で専門的な治療を速やかに提供できる体制が構築されることとなります。このように，オンライン診療をはじめとする遠隔医療は，医療提供体制の維持に苦慮する地域にとって非常に有効な手段となります。今後，医学部附属病院では，オンライン診療の体制を確立することを第一に，更に対応できる診療科を拡大させていくなど様々な遠隔医療の推進に取り組んでまいります。

小児医療センターを設置

令和６年10月１日より，本院入院棟東３階を『小児医療センター』として運用することとなりました。センターの看板を掲げることで，本院の小児医療を院内外へアピールし，地域の子どもたちの健康を守ります。

本センターは，コロナ禍により拍車がかかった少子化に対応しつつ，小児医療サービス提供の充実を図るため，①小児の療養に適した環境の整備，②学習環境の充実，③付き添い家族への支援を目的としています。

これまで同病棟では，小児科，小児外科などの患者に対して，同年代の子どもたちとの交流を通じた安心できる入院生活を提供してまいりました。今後はセンターとして，他診療科の小児患者も利用できるよう受け入れ体制を整えていきたいと考えております。また，学習環境の充実についても，病棟内に学習室を整備し，入院中の小学生から高校生までの子どもたちが安心して学業を続けられるよう充実を図っていく予定です。さらに，長期間の付き添いで疲弊している患者家族に対して，食事支援や休憩場所の提供などの支援を予定しております。

これらの取り組みを実現するために，小児科長（センター長），小児外科長（副センター長），両診療科医師，病棟師長のセンター構成員ばかりでなく，整形外科，泌尿器科，形成外科の医師も参画した連絡会議で検討をすすめていく予定です。

今後とも皆様のご支援を何卒よろしくお願い申し上げます。

（小児医療センター長　照井君典）

令和６年度第１回県民公開講座を開催して

青森県・弘前大学医学部附属病院脳卒中・心臓病等総合支援センター（通称：脳心センター）は，青森県の循環器病患者の死亡率の減少ならびに健康寿命の延伸を主たる目的として令和５年８月に開設されました。２年目を迎えた今年度も，循環器病の相談支援ならびに疾患啓発を中心に活動しています。その一環として，10月20日弘前市土手町コミュニティパークにおいて，令和６年度第１回県民公開講座を開催しました。

テーマは「高血圧を予防しよう」です。富田泰史センター長による当センターの活動紹介に続き，２名の講師の先生方にご講演いただきました。弘前保健所医師村上光太郎先生からは「高血圧の予防と治療の重要性」と題し，高血圧の機序，治療方法，予防の重要性について，大変わかりやすくお話いただきました。続いて，さいとう調剤薬局本町店管理薬剤師齋藤武先生より「高血圧のお薬について」と題し，高血圧薬の種類や服薬継続の必要性などについて大変丁寧にお話いただきました。講演後には多くの質問が寄せられ，活発な質疑応答が交わされました。その後に開催した「血圧測定器が当たる抽選会」では，当選者が発表される度に会場から大きな拍手が起こり，盛況のうちに講演会は終了しました。会場のブースには，減塩食品サンプルの試食や提供，ベジチェック，だし活の体験コーナーが設置され，定員の80名を上回る多くの県民の皆様にご来場いただきました。

引き続き、青森県民に向けた公開講座の定期的な開催や疾患啓発活動を精力的に進めて参ります。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

（センター員　社会福祉士　佐藤誠人）

総合防災訓練を実施

10月22日（火）に本町地区総合防災訓練を実施し，医師，看護師，医療技術職員，事務職員及び学生等約160名が参加しました。本訓練は教職員の災害対策に関する知識・経験・技術の体得と向上，災害時に知己の核となるべく本院の災害医療体制の検証及び災害対策マニュアル及び事業継続計画（BCP）の見直しを目的に実施されました。

当日は，岩木地区において大型バス同士の衝突事故が発生し，病院機能に一切のダメージが無い状態で多数傷病者が本院へ搬送されるという内容で訓練が実施されました。本訓練は職員へ災害想定が伏せられるブラインド型訓練として，実際の災害時により近い形で行われました。

訓練では，コードオレンジメンバーの参集に始まり，災害対策室・前進指揮所の立ち上げ，職員の参集，初療エリア立ち上げや，医学部医学科５年生に協力を得て模擬患者約80名の受入れを行いました。

参加した職員からは「何をすればいいかわからず戸惑った」「平時の教育が重要」「総合訓練だけでなく各部門での訓練も実施すべき」など，職員教育や訓練の充実を求める声や，「病院が被災していないなら電子カルテを使用すれば良いのでは」「カルテ作成が大変だった」「災害カルテの患者 ID が CT 検査機器に入力できない」など災害時のカルテ運用についても多く意見が挙がりました。今後，これらの意見を参考に，更に効果的で実用的な災害医療体制を構築していきたいと考えています。

（総務課）

災害対策室の様子

赤エリアの様子

トリアージエリアの様子

黄色・緑エリアの様子

前進指揮所の様子

振り返りの様子

病院食のイメージと現実：期待を超えた味わい

栄養管理部では，入院患者さんを対象に食事アンケート調査を実施しています。今年度の調査は，厨房移転後，調理方式をニュークックチルに変更してから初めて行われたものです。

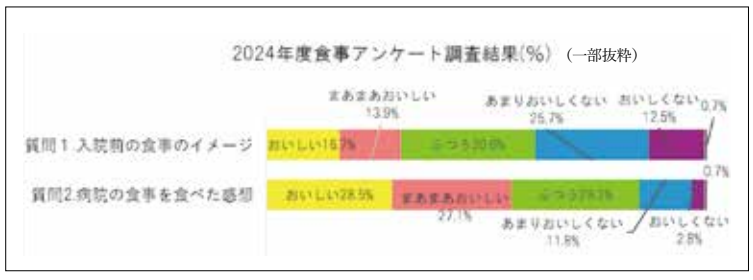
調査は７月12日に実施し，従来の質問項目に加え，「入院前に抱いていた病院食のイメージ」と「実際に食べた感想」という２つの新たな項目を設けました。

結果として，「入院前の病院食のイメージ」については「おいしい」または「まあおいしい」（以下おいしい）と回答した方が30.6%，一方で「あまりおいしくない」または「おいしくない」（以下おいしくない）と回答した方が38.2%となり，病院食に対する先入観はやや厳しいものが多いことが明らかになりました。

しかし，「実際に食べた感想」では，「おいしい」と回答した方が55.6%，「おいしくない」と回答した方が14.6%に留まりました。特に「おいしい」と評価する割合は入院前のイメージに比べて25.0ポイント増加し，逆に「おいしくない」という評価は23.6ポイント減少しました。

また，食事前後の評価変化を分析した結果，48%の患者さんが評価を改善させ，「変化なし」が45.2%，「評価が下がった」はわずか6.8%でした。このことから，当院の食事は「予想以上においしい」という高評価を得ていることがわかります。こうした評価は，給食業務に携わるスタッフの士気向上にも繋がりました。

今後も，給食業務委託会社のスタッフと力を合わせ，安全かつ患者さんの満足度が高い食事の提供を目指していきます。（栄養管理部）



弘前大学医学部附属病院へのご寄附，心より御礼申し上げます

お名前の掲載をご承諾いただいた方に限り，ここにご芳名を掲載させていただきます。

今号では，令和６年８月から令和６年10月末までの間にご入金を確認させていただきました方を公表させていただきます。（経理調達課）

【さくら基金　寄附者ご芳名】

○藤田　一雄　様　○三上　誠二　様

【診療科等　寄附者ご芳名】

○八戸工業大学第二高等学校　第３学年医療コース　代表　楢木　真依　様

○三上　誠二　様　　匿名希望　　３名

※掲載の同意をいただいた方以外は，匿名希望とさせていただきました。

【 編集後記 】

南塘だより第116号をお届けいたします。ご執筆いただました皆様に厚く御礼申し上げます。今年の冬は正月からの大雪で多くが雪かき正月をお過ごしになったかと思います。昨年は記録的に雪が少ない年でしたので，（温暖化で）今年も少ないかな？と予想していたのですが，そんなに甘くないよ，と自然の厳しさを痛感させられる１年の始まりでした。また今年はインフルエンザが大流行しています。コロナとインフルエンザのダブル感染も見られますので，健康第一で体調など崩されませんようにご自愛ください。

（病院広報委員会　先進血液浄化療法学講座　畠山真吾）